アノミー論の主体的側面

—仮説発見的考察—

本　村　　汎

An Aspect of Ego Identity in the Theory of Anomie

—A Discussion for the Finding of New Hypotheses—

HIROSHI MOTOMURA

アノミー論の理論的背景

アノミー論は，逸脱行動を説明する理論として，現在社会学の分野で依然として着目されているが，本論の主題にはいる前に，この理論がなにゆえに提起されたかを従来の「社会問題論」との関連において明らかにしておきたい。

社会の病理現象，特に逸脱行動を説明するアノミー論が，日本に紹介される以前は，すでに「社会問題論」と称する，いわゆる史的唯物論の仮説に立脚する分析理論が存在していたのではないかと考えられる。この分析論が，社会の構造を下部構造（通常経済構造を意味する）と上部構造に範ちゅう化し，上部構造は下部構造によって決定される，とするところに特徴があることは，すでに承知の事実である。結局，この分析理論は，すべての問題状況，たとえば，その発生過程において個人的および家族的要因の影響の強い非行，犯罪，情緒障害，アルコール中毒，精神分裂病などさえも，社会の経済構造の矛盾に還元して説明しようとするのである。しかし，この理論は独立変数としての経済構造と，従属変数としての逸脱行動あるいは病理的行動との間に存在する無数の媒介変数を，全く軽視している感がある。たとえば，資本主義社会の経済構造上の至命的矛盾が，具体的な逸脱行動として具現化するまでには，個人のパーソナリティ，家族，近隣関係，地域社会などの種々の変数が力動的に介在してきているのである[1]。したがって，筆者は，たとえすべての問題の本質的原因が資本主義的経済体制の経済構造の矛盾にあるとしても，その矛盾があらゆる場合において，すなわち，上記の媒介変数の力動的な相互作用如何にかかわらず，逸脱行動や病理的行動につながっていくとは思わない。これらの媒介変数の力動的作用如何によっては，資本主義社会の経済構造の矛盾は，人間の具体的行動を規制する力としては，まったくとるにたらない程の小さなものになるであろうし，また，ときには，人間行動を規制するより大きな力となるであろう。おそらく，このような考え方は，マルクス社会学者から社会構造の階級性や支配—従属的な側面をまったく軽視していると批判されるであろう。しかし，逸脱行動をひきおこしている個人は，下層階級においてのみ発生しているのではなく，上層階級からも発生している。とくに，われわれの家族の臨床的研究は，神経症患者は下層階級よりも中産階級からより多く発生していることを示している。といえば，筆者が逸脱行動や病理的行動を説明するのに，社会構造の階級性や貧困文化を無視しているかのようにみえるが，事実はそうではない。筆者が指摘したいことは，逸脱行動や病理的行動を決定するのは，これらの要因を含めたところの種々様々な媒介変数の力動的相互作用のあり方であるということである。しかし後に触れるように，本論文でとくに筆者が強調したい媒介変数は個人の主体性[2]（ego identities）であることをあらかじめあきらかにしておきたい。

以上みてきたように，史的唯物論の仮説に立脱する「社会問題論」は，論理構成があまりにも単一であり，一方向的であり，機械的であり，現実味（reality）が乏しい。アノミー論は，この先輩にあたる「社会問題論」の方法論的欠点を補うことができるものとして，「社会参加論」[3]，「葛藤理論」[4]，「文化構造論」[5]と共に，社会病理学者によって紹介されたのではなかろうかと考えられる。以上のような理論的な背景を基礎にしながら，以下アノミー論を系譜的に検討し，新しい仮説発見のための布石としていきたい。

アノミー論の系譜—客体的側面の偏重—

アノミー論を系譜的に検討するならば，古くは，プラ

トン，ホッブス，ルソーなどに求めることができる。というのは，プラトンは，政治的秩序のタイプと人間の行動タイプとの関連性を追求し，またホッブスとルソーは，「自然状態」(state of nature) を概念化し，それを出発点として人間の行動を規制する論理として社会契約論を構築しているからである。しかし，人間の適応行動や逸脱行動を社会的秩序との関連で説明しようとした学者は，オーガスト・コント (August Comte) といわれている。彼は，人間の集合的性格に着目し，それを基盤にした集合的秩序によって，人間の行動を説明しようとしたといわれている。なお，19世紀の社会学者に目を向けるならば，アノミー論の系譜の中に入れられるものとしては，デュルケーム (Emile Durkheim) の「社会拘束論」，クーリー (C. H. Cooley) の「人間性と社会的秩序」およびウェバー (Max Weber) の「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」などがあげられる。これらの社会学者は，いづれも人間の行動を決定する要因として，社会秩序，集団，社会制度の役割を強論している。このようなオリエンテーションは，人間の行動を理解しようとする時の心理学的あるいは精神医学的オリエンテーションとはまったく異なるものであり，行動科学の発展に対して大きく貢献するものであるが，このような客体的条件のみを重視するオリエンテーションは相対的に独立したひとつの系としてのパーソナリティの体系の機能をまったく無視している。以下，その点を，アノミー論の創始者といわれるデュルケームと，彼の理論を発展させてきたといわれるマートン (Robert K. Merton)，パースンズ (T. Parsons) およびコーヘン (Albert K. Cohen) において，いますこし詳細に検討してみたいと思う。

まず，デュルケームの場合であるが，彼が「アノミー」という概念を使ったのは，1893年の「分業論」(Division of Labour in Society)[6] においてである。そこでは，「アノミー」概念は理論的に明確には規定されてはいない。ただ分業の異常性に着眼して，「アノミーは，分業がメンバー間の効果的な作用を生み出せない場合とか，社会的関係を十分に統制できない場合におこる」と規定し，それに対して「アノミックな分業」(anomic division of labour) という用語を用いている。しかし，彼はこの著書においては，アノミー概念の内容そのものについてはまったく触れていない。しかし，4年後に出版された彼の「自殺論」[7] においては，アノミー概念を「無規制状態」としてとらえ，自殺率との関連で論理を展開している。彼によれば，自殺という病理的行動は社会的秩序の統制機能の喪失によるものである。なお，彼は「無規制状態」がなぜ発生するかについて，「人間の欲望が充足不能にまで高まることを集合的秩序が許すからである」と述べている。すなわち，彼はアノミー概念を，人間の無限の欲望と社会的秩序（社会的事実）との関連のなかにおいてとらえ，社会的秩序が欲望を統制できないことからくるものとして位置づけている。なお，彼は社会的秩序に欲望統制の機能を付するだけでなく，人間に新しい欲望をつくらせる機能やその表現様式を決定する機能まで与えている。このように，デュルケームのアノミー理論においては，「社会的事実」（社会体制，社会的道徳社会的規範，社会的期待，文化）の規定力の乏しさが非常に大きく評価され，この社会的事実の規定力を個人がどのように受けとめ行動していくかという主体的な側面はあまり評価されていない。たしかに，人間の「主体性」ははじめから存在するものではなく，社会的事実によってむしろ形成されていくものである。しかし，その社会的事実の無規制状態を変革していくのは，個人の主体性にある。その意味において，デュルケームのアノミーの考え方は保守的であろう[8]。しかし，このようなデュルケームの考え方の保守性は，当時のフランスの混頓としたアノミー的な不安定社会を安定させるために，社会の集合的規制力を強化しなければならないという信条的動機と無関係ではないであろう。以下，社会的事実を強調しながら，その社会的事実によって，人間の欲望を統制あるいは規制するのに失敗したアノミー状況について彼の説明を引用してみたい。

「現実に宗教は殆んど力を失なってしまった。そして経済生活を統制するはずだった政府は，経済生活の道具となり，召使となった。そして，国家はその主たる目標としての経済的繁栄を持つに至った……。産業は目標遂行のための手段から個人や社会の最高目的となってしまったのである。かくして，かきたてられる人間の欲望は，抑制する権威の統制からもれてしまうのである。……欲望はどこで究極の安定の場を発見していいか分からないままかきたてられていくのである。この欲望を静めるものは何ものもない。したがって，欲望の目標は，充足達成可能な域をこえてしまうのである。そして現実は価値のないもののように思われてしまうのである。かくして，現実は放棄されてしまう。……こうして創造的可能性もまた放棄されてしまうのである。……珍しいこと，たとえば異常な快楽や，言語道断な感覚を追求する渇望が発生してくる。……すべての情熱は沈下し，そしてあらゆる感覚的激動の

無意味さが表面化し，新しい感覚は，幸福のための安定した基礎を確立するに至らない。……現在では，前にも後にも，彼が注目しなければならないものは何ひとつ残っていない。ただ残ったのは，幻滅をもたらす疲労感だけである。…」[9]

このように，彼は人間の欲望と社会的統制力の文脈のなかでアノミー概念をとらえているが，彼は人間の欲望を本質的に分類・分析していないし，また社会的統制力の内容分析もおこなっていない。ただ示していることは，社会的統制力を強化しなければならないということである。もし，彼のアノミー理論を発展させていこうと思うならば，人間の欲望をタイプ化して，そのタイプ化された欲望と社会的統制力を理論的に結びつけていくことであろう。しかし，デュルケームは，アノミー状況の人間の欲望的側面よりも客観的側面を強調しているために，もし，彼のアノミー理論を直接的に敷衍していくとするならば，社会的環境の分類作業という研究が表面にあらわれてくるのであろう。事実，この研究はダーレンウェンド (Bruce P. Dohrenwend)[10] によってさきがけられている。しかし，後に論ずるように，アノミー理論の精密化をわれわれが期待するならば，「欲望」概念に代って，「主体性」の概念に着目する必要があるであろう。なぜならば，主体性の概念は，人間の持っているいろいろの欲望を社会からくる圧力との関係で統合してある一定の価値を定め，そして，ある一定の方向にむかって具体化していくものであるからである。

以上，われわれは，デュルケームのアノミーの論理構成を明確にし，その精密化を企図するために，社会的統制力のタイプ化と同時に，欲望にかわって「主体性」の概念を導入すべきことを主張した。しかし，本節の目的は，従来のアノミー理論の客体的側面の偏重を明確にしていくことにあるため，いますこし，この問題をマートンのアノミー論[11]において検討してみたいと思う。

デュルケームは，アノミー理論において，欲望と社会環境の持つ統制力に着眼したが，マートンは後者の力を一歩，分析的に押しすすめている。なぜならば，マートンは，デュルケームが「社会的環境の統制力」という時の「社会的環境」を，文化構造と社会構造に分けて，これらの二つが調和あるいは矛盾する状況に着眼するのである。そして，その矛盾のあり方から人間の逸脱行動を説明しようとするのである。この場合，彼が文化構造といっているのは，所定の社会成員や集団成員の共通な行動を支配する規制的価値の組織化されたものであり，そして社会構造といっているのは，文化的目標を達成するための制度的規範のことである[12]。すなわち，制度的に決められた手段，いわゆる社会成員や集団成員の社会的関係が組織化されたものである。このような文化的目標と制度的手段を組み合せて，逸脱的行動を説明しようとするのである。たとえば，非行，犯罪などの逸脱行動は，文化的目標を過度に強調しながらも，それを成就するための制度的手段が極度に制限される状況のなかでおこると考えるのである。すなわち，制度的に決定されている手段を利用する機会 (oportunity) がまったくないために，その制度的手段を無視して，金銭的成功，職業的成功，権力取得のごとき文化的目標を遂行しようとするのである。下層社会において，犯罪，非行の発生率が高いのは，貧困と教育程度の低さの故に，この制度的合法手段を利用できない人が数多くいるということになる。しからば，自閉症，精神障害，アルコール中毒などは，彼の理論的枠組にしたがえば，どのように説明できるだろうか。まず考えられることは，その社会の文化的目標やそれを実現していくための制度的手段のいづれをも拒否する心理社会的状況のなかでおこるということである。つまり，マートンが，逃避型と範疇化しているグループは，その社会の代表的な文化的目標や制度的手段を洞化するどころか，それに接近していく困難さに直面して，諦観的になってしまう人々の集りである。しからば，その文化や制度の洞化能力の発展をはばむものは何であろうか。マートンは，その問題に関して，文化的目標とそれを遂行するための機会の不統合を指摘する。つまり，個人の洞化能力の発展は，その不統合状況によってはばまれるのである。

以上，検討してきたように，マートンは，「文化的目標」と「制度的手段」の二つを軸にして4つのタイプの逸脱行動を説明しようとしているが，彼のいづれの論文においても，文化構造や社会構造からくる刺激や規制力を個人がどのように受けとめて統合するかという，いわゆる「主体性」の問題はあまり掘り下げられていない。この概念をマートンのアノミー理論の中に組み入れることによって，精神病理的行動と逸脱行動とを区別することができるし，また，逸脱行動が社会に対して，積極的かつ中心的価値をもっていく状況を説明できるのである。逸脱行動は，必ずしも社会にとって逆機能的な意味を持つものではない。むしろ，それが成功すれば，その社会や集団の発展につながっていくのである。

このようなアノミー理論における客観的側面の偏重を修正する理論としては，パースンズ，デュビン，コーヘンなどのアプローチがあげられる。たとえば，パースン

ズのアノミー理論は，その基礎をマートンの理論においているとはいえ，それは単にマートンの理論の拡大そのものではない。それはパースンズ独自の「相互作用理論」のなかに組み入れられているのである。たとえば，マートンが文化的目標と制度的手段の間の緊張のみを問題にしたのに対し，パースンズはその緊張の発生源としていくつかの状況を考える。そのひとつは，われわれ個人が制度的に受容される方法で対象附着関係を維持できない場合とか，あるいは自分自身に対する自らの期待と，自分自身に対する他人からの期待が一致しない場合に発生する緊張などである。

なお，逸脱方向に関しても，パースンズのタイポロジーは，マートンの理論的枠組をこえて構成されている。彼は，マートンが「文化的目標」と「制度的手段」の二つの軸に着目し，4つのタイプの逸脱行動を設定したのに対し，3つの軸，すなわち，社会化の過程における (1) facilities-achivement balance, (2) reward (input) -cathexis of external object balance, (3) internal balance の3つの軸に着目し，そこから6つのタイプの逸脱行動を理論的にひき出している[13]。まず，第一の分析軸から理論的にひき出している精神病理的症状群はパラノイド性 (paranoid) のものと，分裂性(schizoid) のものである。パラノイド性の症状群の特徴は，パーソナリティの統合能力以上に情報を吸収 (input) するが，それを十分に統合できないで結局は病理的な投射機制を通じてパーソナリティを安定化するところにある。それに対して，分裂性の症状群の特徴は，自己防衛があまりにも強くて，外的状況に関する情報をとり入れることなく，自己愛的に問題を処理するところに特徴があるのである。このような方法で，第二の分析軸からは，そうーうつの二つの精神病理症状をひき出し，そして第三の分析軸からは，精神病質的症状群と強迫神経症的症状群の二つの精神病理症状をひき出している。これらの症状群は，社会学者が通常問題にするところの「疎害」と「強迫的適合」(compulsive conformity) と呼んでいるところのものと密接な関係がある。これらは，パーソナリティの適応機制の観点からは，前者が抑圧の失敗による行動化 (act out) で特徴づけられるのに対し，後者は否定的な自我統合によって特徴づけられる。

以上は，パースンズが前述の3つの軸から理論的にひき出してきた逸脱行動であるが，上記の説明からも分るように，彼は逸脱行動を説明するのに，マートンのように社会構造や文化構造の矛盾の観点からのみアプローチするのではなく，対象関係の内面化されたものとしてのパーソナリティ体系を分析枠組の中に導入している。もし，われわれが，同一社会，同一文化，同一階層のなかでみられる逸脱行動の多様性を説明しようとするならば，マートンが指摘した文化構造と社会構造の矛盾のあり方を個人がどのように受けとめるかというパーソナリティ体系のあり方と「主体性」確立の過程とを問題にする必要があるであろう。しかし，パースンズも，この「主体性」確立の過程については，掘り下げて分析をおこなっていない。主体性の確立をはばむものは何かという発想法は，彼の後の論考過程においてはどこにも見当らない。

さて，これまでマートンのアノミー論を基礎にして論理を展開してきた学者としてパースンズをとりあげ，彼の逸脱行動に関する「相互作用」理論を説明してきたがマートンのアノミー論を批判するかたちで，新しい理論を提唱した社会学者のなかで，特に注目しなければならない社会学者がいる。それは前述のコーヘン[14]である。コーヘンは，マートンの「文化的目標」，「制度的手段」，「機会の利用」などの分析枠組について，アトミスティック (atomistic) であると批判する。すなわち，彼は実利を伴わない非行集団は，マートンの分析枠組では説明できないと批判するのである。たしかに，マートンは文化構造と社会構造の矛盾，すなわち社会的アノミー＝無規制状況から個人の逸脱行動を説明しようとしており，逸脱の集団的性格についてはまったく触れていない。しかし，現実には，とくに下層階級の社会においては，非行集団が頻発しており，したがって，逸脱理論の一般化と普遍化が要求されるとするならば，これらの客観的事実を十分に説明できるものでなくてはならないだろう。このように考える時，これから説明するコーヘンの理論は，マートンのアノミー理論に挑戦する理論としてとらえることができるであろう。

まず，彼の非行集団に関する基本的仮説の特徴は，非行集団を階級の構造化の産物である[15]，と規定するところにある。すなわち，彼によれば，非行集団は，「野心」，「自己依存」，「礼儀正しさ」，「直接的満足の延期」，「適度のレクレーション」，「暴力の否定」および「財産の尊重」などで特徴づけられるところの中産階級的価値体系に対する下層階級の反動形成的な集団的解決の産物なのである。結局，下層階級の人々は，下層社会が前述のような価値体系をもっていないことに対し極度の欲求不満を持っており，また中産階級の価値体系を所持していないために，中産階級に所属する人々から軽蔑されることもあって，彼らの具体的な行動は，中産階級の価値体系に対する下層階級共通の敵意 (hostility) としてあ

らわれてくるのである。なお，彼は，下層社会における非行文化の特徴として，「破壊性」，「非行形態の反復性」および「大規模なネガティヴィズム」を上げ，中産階級の価値体系に対立する文化パターンとして位置づけるのである。結局，非行集団は，第一義的には中産階級の価値体系に準拠した生活様式を希望しながらも，それが実現できないために，それを否定してしまう価値体系を発展させ，ひいてはそれが非行集団という社会病理現象を形成していくのである。

第二に，コーヘンによるマートンのアノミー論の批判は，マートンが社会的相互作用過程にある相手の緊張，適合，逸脱および成功，不成功を考慮しなかった点にある。[16] コーヘンは，理論の精密化を希望するならば，一般的な「文化的目標」や「制度的手段」を現実の役割保持者の目標と関連づけることの必要性を強調している。すなわち，一般的な文化目標は必ずしも，具体的な集団の目標にはなり得ない時があり，また，社会相互作用過程にある相手の緊張や逸脱の度合によって自己の成就目標水準が決定される時があることを無視しているというのである。結局，コーヘンによれば，マートンのアノミー理論は，ある特定の行動を形成し，加工し，そして変形していくプロセスの論理によって構築されているというよりも，アノミーに先行する変数とその結果を説明する変数とによって構成されているというのである。おそらくこの批判は妥当であろう。たしかに，マートンは彼のアノミー理論においては，逸脱行動をひきおこすのに一役買っている複数の人間の役割の相互交渉過程を考慮していない。したがって，筆者は，マートンのアノミー論を発展させる意味からも，役割理論との完全な統合が必要であることを強調したいが，同時に「主体性」の理論の導入が必要であることはいうまでもない。役割は，アノミー理論においては，目標，規範，手段などに関連してくるところの，社会的構造のなかの地位と関連してくるが，この地位—役割の実施を最終的に決定するのは，まさに，その個人の「主体性」のあり方に存するといえる。しかし，コーヘンの理論においては，社会的相互交渉の側面は問題提起としてとり上げられているだけであり，むしろアノミー理論の客体的側面，すなわち，非行文化が強調されている。

以上，われわれは，デュルケーム，マートン，パースンズ，コーヘンなどの逸脱行動についての理論を，アノミー論を中心にして説明してきたが，いずれの場合も主体的側面の考察が不十分で，どちらかといえば，アノミー理論の客体的側面を重視する傾向が強かった。したがって，次節においては，この「主体性」の問題に接近していってみたいと思う。

媒介変数としての主体的側面

まず，これまで考察してきた理論においては，社会的条件のみが，一方的に強調されている。たとえば，デュルケームの社会的統制力，マートンの社会構造と文化構造，パースンズの相互作用のあり方，コーヘンの非行文化など，すべてひとつの「社会的条件」である。すなわち，彼らの理論のなかの中心的仮説は，社会的条件—心理的状態—逸脱行動である。デュルケームとマートンとでは，これらの各要因の内容は異なるが，要因間の論理関係はまったく同じである。彼らは，上述の各要因間の因果連鎖（causal chain）のなかで独立変数としての「社会的条件」と，従属変数としての「逸脱行動」のみを重要視し，これらを結合させるところの媒介変数としての主体的側面（心理状態）が十分には考察されていない。すなわち，個人が社会的条件をどのようにうけとめるかという，いわゆる主体的社会的条件の役割の分析をおこなっていない。この分析をおこなうためには，マキバー（Robert M. MacIver）のアノミー概念を検討してみる必要がある。なぜならば，彼は前述の因果連鎖のなかで媒介項に焦点をあててアノミー理論を展開している。彼によれば，アノミーは，「道徳的根源（moral roots）をひき抜かれた個人の心理的状況」として規定される。……「アノミー的人間は精神的には荒廃し，すべてに責任をとることなく，ただ自己自身のみに反応する。彼は，将来も過去も存在しないような無感覚状況で生活している」。[17] また，アノミーを心理的状況として規定する学者には，レオ・J・スロール（Leo J. Srole）がいる。彼は，アノミーを個人の構端な他己への所属感覚（sense of self-others belongingness）や個人の他己からの疎外感覚（sense of self-others alienation）としてとらえている。[18] このような感覚をもった個人の状態を「規範」（norm）の概念によって補足的に説明するならば，アノミー的個人には，行動を統制する規範が，弱くて，不明確で，縁遠いものとして感じられるということである。しかし，この概念の中核は「道徳的空虚の感情」（the feeling of moral emptiness）といって差しつかえない。このように，アノミー概念は個人の心理的状況として一応規定することもできるが，ここで重要なことは，このようなアノミー感情が社会的矛盾のなかの個人の如何なる心理力動性（psychodynamics）あるいは主体的側面とかかわりあう時に発生するかということである。この問題解明にあたり「学習理論」を導入し

たい。

社会の規範が「学習」されるのが事実だとするならば，規範が存在しないというアノミー的感情が学習されるのもまた事実である。学習はいろいろなものの機能的帰結として考えられる。たとえば，指導過程の性質，および学習の能力や動機づけ，学習強化の程度と頻度，および学習上の障害物の種類と量等は，学習そのものに大きな影響を与えるであろう。

アノミー感情が学習されるという基本的な命題に立脚するならば，それから次のような具体的な仮説をひきだすことができる。その仮説は，社会の規範を学習することを妨げるようなものは，その個人にアノミー的感情を増大させていくであろうということである。この仮説はすでに実証されている。社会的規範を学習するのに有利な社会的地位にある人々は強度のアノミー的感情を示していないのである。それに対して，低い社会的地位にある人々，たとえば，その社会で生活していく場合に，より基本的なものとして考えられる価値をもっていない人々は，より強度のアノミー的感情を示している[19]。結局これらの人々は，貧困，教育程度の低さ，雇用条件の悪化などが手伝って，その社会の主要な文化的潮流から孤立してしまっているのである。なお，これらのネガティブな社会的条件は社会生活におけるコミュニィケーションを相対的に減少させ，そして全体地域社会の規範の学習能力を低下させ，ひいては無規制感情（feeling of normlessness）を生起させることと考えられる。結局，それが如何なるものにしろ，地域社会の規範を学習する個人の能力を低下させたり，その社会の中心的な文化様式への社会化を妨げたりするものはすべて，アノミーの決定要因として考えられねばならない。

たとえば，社会的役割，地位，あるいは社会的場がその規範の学習過程を妨げるのであれば，アノミー感情の決定要因はあきらかに社会学的なものである。しかし，ある要因は，社会学的なものというよりも心理学的な，あるいは個人的なものである。もしそうでないとするならば，ある特定の役割を与えられた個人はすべてアノミー的な状態になってしまうであろう。しかし，このようなことはおそらくあり得ない。

理論的に考えられることは，社会学的な決定要因と心理学的な決定要因の2つが同時に作用し，またときには相互に独立に作用してアノミー感情を生起するのである。所定の社会内において同一の社会的環境を分有している人々がすべて同じような方法で，社会に反応することはない。このことは，同じような心理学的性格や知的性格をもっている人々にとっても同様にいい得ることである。ある社会で，ある特定の社会的環境，たとえば，低い社会的地位，低い教育水準にある特定タイプのパーソナリティを持った個人（たとえば，不安度の高いパーソナリティをもった個人）は，アノミー的状況を呈しやすいだろう。それに対して，比較的安定した社会にあって，自信をもっている個人は，アノミーに対する抵抗力も強いだろう。ここで筆者が強調したいことは，アノミー感情が必ずしも単一の要因によって生ずるのではなく，規範の学習が極度に妨げられる時はいつでも生じてくるということである。この障害となるものは，個人の社会的場と個人のパーソナリティ特性のいずれかから，あるいはその両者から生ずることであろう。

「社会的場」の分析は，マートンを代表とする多くの社会学者によっておこなわれているため，ここでは，いま少しパーソナリティの特性をアノミーとの関係で分析してみたい。規範の学習を妨げるパーソナリティ次元の決定因子は次の3つに分けることができる。それは，(1) 認知的要因（cognitiue factors），(2) 情緒的要因（emotional factors），(3) 孤立的な信念と態度である。第1の要因が力を欠く時は，個人は彼に直面する複数の事件や思想を組織化して理解することができなくなり，不安定，もしくは自信喪失状態になり，ひいては問題や不安を生起することであろう。そしてその結果，彼は社会の価値に関して当惑し，社会そのものが秩序を欠いているとか，あるいは意味のないものであるかの様にみるであろう。とくに，急激な変動を続ける複雑な現代社会においては，この認知能力の欠如は，アノミー感情の重要な決定要因として考えられる。

第2の情緒的要因がアノミー感情との関連でもつ意味は，この要因が多様性に豊んでいて，認知的要因の機能を妨げることにある。これらの情緒的要因はいろいろの方法でアノミーへの傾向を強化するであろう。ある情緒的状態は，個人が環境を現実的に構造化できないように認知的機能（cognitive functioning）を妨げるのである。また，ある情緒的状態は，個人の相互交渉能力を減少させ，その結果，自己の信ずるものや価値とするところのものを学習させないようにするのである。学習，すなわち個人の社会化は，いろいろの文脈のなかで他人と共に生活し，働き，語るという社会的な相互交渉過程を通じておこなわれるのである。たとえば，他人に対して極度の敵意をもっている個人は，その敵意のために，個人との相互交渉能力を縮少させられ，その結果として，社会の規範や価値に精通することを妨げられ，ひいては

社会をアノミーとしてみるようになるのである。

第3のアノミー規定要因としての「孤立的な信念と意見」は，集団や地域社会と関連性をもたせることによって，その意義を見い出すことができる。如何なる信念や意見をもっているかによって，地域や集団からの受け入れられ方が違うのである。ニューカム（Theodore M. Newcomb）の研究によれば，適当な価値と信念を習得した人は，集団の成員によってより容易に受け入れられまた集団内では，容易に権威ある地位を獲得することができるということである[20]。なお，ひとたび集団から受容される程に集団の価値を学習し，受容するようになると，彼の集団参加は，内面化された集団価値を強化するようになるのである。

それに対して，集団の支配的な価値を学習しない人や共通性を欠いた信念や意見をもっている人々は，集団から受け入れられないのが普通である。この事実は，さらには，コミュニケーションを減少させ，そして集団への社会化をより困難なものにしてしまうのである。逸脱者は集団の価値や規範を理解するのに，なくてはならない基本的な集団参加の経験をもっていない。かくして共通に広く分有されていない価値や意見をもっている人々は集団から受容されず，その結果，集団や社会の支配的な規範を学習できず，ひいては社会をアノミーとしてみるようになるのである。

以上，われわれは，アノミー感情の決定要因を簡単に分析し，考察を加えてきたが，筆者が主体的側面というのは，個人がある所定の社会的場におかれた時，前述の3つの要因がどのようにかかわりあうかということである。どのようなタイプの逸脱行動を採用するかは，これらの3つの諸要因のパターン，すなわち，社会的条件を個人がどのようにうけとめるかという主体的側面の如何に依拠していると考えられる。これらの3つの主体的要因の組み合せに関するパターンを，いますこし詳しく理論的に分析することによって，個人的条件と社会的条件が統合されるより精密なアノミー理論を発展させていくことができるであろう。

要　　約

この論文の目的は，従来の社会学的アノミー理論を批判し，これまで無視されてきた「主体性」概念を導入することによって，逸脱行動についての新しい仮説を発見しようとするものである。分析のための資料は，主として，マートン，パースンズ，デュルケーム，コーヘンなどの逸脱行動についての論文考察から得られたものである。

分析の結果は，犯罪，非行，アルコール中毒などの逸脱行動を説明するのに，社会一文化的要因のみが強調されていることを示している。たとえばデュルケームは，人間の「欲望」と「社会的環境」の統制力との文脈において，アノミーを概念化し逸脱行動を説明しているにもかかわらず，社会的統制力の無力さのみが強く指摘されている。また，マートンの分析枠組は，「文化的目標」，「制度的手段」，「機会構造」の諸概念から構成され，これらの矛盾を受けとめる「主体」の分析は全くおこなわれていない。また，パースンズとコーヘンも，逸脱行動の相互作用的側面に，集団や社会階層の観点から焦点をあてるが，「主体性」や「心理力動性」の側面は，彼らの逸脱行動理論のなかには位置づけられていない。

このような批判的考察を通じて，われわれは次のような基本的仮説をひき出した。

1. 道徳的空虚の感情や疎外感覚は「学習」されるものであり，そしてその学習過程は，その人の動機，心理力動，教習過程などによって影響される。
2. 社会的規範の学習を妨げている状況は，アノミー感情の度合を強化するであろう。
3. 教育程度の低い人や雇用条件のわるい人は，その社会の文化的な主たる潮流から孤立しているためにアノミー感情を持ちやすいだろう。
4. アノミー状況は，社会一文化的要因と心理学的要因の作用のひとつの産物である。
5. 無規制状況や道徳的空虚の感情や疎外感覚などに導いていく社会構造と文化構造の矛盾は，「主体性」のあり方を媒介にして逸脱行動をひきおこす。
6. 逸脱行動の相違は，主体性のあり方と密接な関係がある。

注

1）富永健一，「社会変動の理論」，岩波書店，昭和43年40頁

2）Erik H. Erikson, "Identity and the Life Cycle", *Psychological Issues*, ed. George S. klein, International University Press, New York 1959, pp. 19-26.

3）Queen Grummer, *Social Pathology*, New York, 1940.

4）William Ogburn, *Social Change*, New York, 1922.

5）Ralph Linton, *The Stud of Man*, New York, 1936, 特に第16章と20章を参照.

6）Emile Durkheim, *The Division of Labour in*

Soclety, Trans., George Simpson, New York, The Free Press of Glencoe, 1947.

7) Emile Durkheim, *Suicide : A study in Sociology*, London, 1952.

8) Cf. 折原浩, 「デュルケーム社会学の保守主義的性格」, 「社会学評論」, 第19巻第4号, 2頁—20頁.

9) Emile Durkheim, *Suicide : A study in Sociology*, London, 1952, pp. 255-56.

10) Bruce P. Dohrenwend, "Egoism, Altuism, Anomic and Fatalism : A Conceptual Analysis of Durkheim's type", Amer. *Socso. Rev.*, Vol. 24, 1959, pp. 466-73.

11) Robert K, Merton "Social Structure and Anomie : Revisions and Extensions", in *Family*, ed. Ruth Nanda Anshen, Harper & Brothers Publishers, New York, pp. 226-257.

12) Robert K, Merton, *Social Theory and Social Structure* (Revised), The Free Press, Glencoe, 1957, p. 162.

13) Talcott Parsons and Robert F. Bales, *The Family : Socialization and Interaction Process*, The Free Press, Glencoe, 1959, pp. 250-257.

14) Albert K. Cohen, *Delinquent Boys : The Culture of Gang*, New York, The Free Press of Gleneoe, 1955, この理論を批判する論文としては, John I. Kitsuse & David C. Dietrick, "Delinquent Boys : A Critique", *Amer. Socio Rev.*, Vol. 24, 1959, pp. 208-15, 最近の実証的研究は, 地位喪失と非行との関係についてのコーヘンの理論を否定しているように思われるが, まだ完全に否定されたわけではない。 Albert J. Reiss, Jr. and A. Lewis Rhodes, "A Status Deprivation & Delinquent Behavior", *Sociological Quart.* Vol. 4, 1963, pp. 135-49.

15) Albert K, Cohen, ibid.

16) Albert K, Cohen, "The Study of Social Disorganization and Deviand Behavior", in Robert K, Merton etal. eds. *Sociology Today*, New York, Basic Books, 1959, pp. 467-468.

17) Robert M, Maclver, *The Ramparts We Gurd*, (New York, Macmillan, 1950), p. 84.

18) Leo J. Srole, "Social Integration & Certain Corollaries : An Expoloratory Study", *Amer. Socio. Rev.*, 21 (December, 1956), pp. 709-716.

19) Cf. Seymour Martin Lipset, *political Man*, New York : Doubleday, 1960, 第4章参照.

20) Theodore M. Newcomb, *Personality and Social Change*, New York : Holt, Reinbort and Winston, 1943, 特に8章参照.

Summary

This paper attempts to criticize the sociological theories of anomie and to find the new hypotheses of deviant or psychopathelogical behaviors in terms of ego identity which is not considered in its sociological analysis so far. The data for the analysis are gathered from the bibliographical study of the sociologists' (E. Durkheim, R. K. Merton, T. Parsons, A. K. Cohen) theories of anomie.

The analysis indicates that their theories overemphasize only the sociological and cultural factors in the explanation of the deviant behaviors such as crime, delinquency, narcotics, and alcoholicism. For example, Durkheim emphasizes the lack of social control in his explanation of the deviant behaviors and Merton's analytic frame of work consists of the institutional means, cultural goal, and opportunity structure. While Parsons and Cohen give their attentions to the aspect of the interaction in terms of group and social class, the conception of ego identity or psychodynamics are not framed in their theory of the deviant behavior.

Through the critical discussion stated above, the following basic propositions were derived.

1. The feeling of moral emptiness is learned by the individuals, and their learning proccesses are influenced by their motivation, psychodynamics, teaching process and other obstacles.
2. The situation in which the learning of the social norm is impeded will increase the degree of anomic feeling.
3. The peaple with poor education and poor employment conditions would be likely to have anomic

feeling because of their isolation from cultural main stream of the society.

4. Anomic situation is a product of the operation of scio-cural factors and psychological factors.
5. The contradiction of socio-cultural factors leading to the normless situation or the feeling of moral emptiness will bring about the deviant behavior through the intervening the ego identity of the individual.